

12世紀のシトー会シルヴァネス修道院の 歴史叙述における起源の記憶

La mémoire des origines dans l'historiographie
de l'abbaye cistercienne de Silvanès au XII^e siècle

北 館 佳 史

要 旨

本稿は『レラスのボンズの回心に関する論考とシルヴァネス修道院の始まりの真の物語』を分析の対象として共同体が起源をどのように記憶したのか、それが作成された状況においてどのような意味を持っていたのかを明らかにすることを目的とする。シルヴァネス修道院の第4代院長ボンズは1160・70年代に内外の動揺を抑えて修道院の規律を立て直す改革の一環として創建者と共同体の歴史の編纂事業を行った。この史料の検討から重要な特徴として、現在と過去を統合するためにシトー会と共通する荒れ野や清貧や労働の主題が強調される一方、隠修士時代からの共同体の慈善の伝統の連続性とシトー会への加入手続きの正当性が主張されている点が挙げられる。また、初期の施しによる経済からシトー会時代の蓄積と生産の経済への移行が描かれるとともに、手の労働や執り成しの祈り、さらには緊急時の食料支援の物語を通じて修道院の富が正当化されている点が注目される。

キーワード

歴史叙述, シトー会, エコノミー, 隠修士, レラスのボンズ

はじめに

修道院という組織がその起源の記憶に特別な意味と価値を与え、言説や儀礼を通じて絶えず想起し、現在に関連づけ、適応させることで共同体の

アイデンティティを安定化させようとするこゝと、また、特定の状況で語り継がれてきた共同体の記憶を永続化するために文字化し、共同体の歴史を編纂することに近年では多くの研究者の注目が集まっている¹⁾。12世紀から修道会という新たな組織形態が発展すると、団体としてのアイデンティティを堅固にするために修道会の起源の記憶が様々な形で書かれた。12世紀の新修道制の中でも急激に巨大組織に発展したシトー会では創立史やエクセンプラヤや聖人伝などの形式で修道会の歴史の叙述が盛んになされた²⁾。

しかし、修道会組織の歴史の重要性が高まったからといって個々の修道院の歴史叙述の実践が絶えたわけではなく、それぞれの利害や関心に基づいたローカルな歴史が書かれた。盛んに創立史が書かれたイングランドとスカンディナヴィアの事例に関しては近年研究が進められている³⁾。

ところで、シトー会加入以前に隠修制を経験した共同体では起源の記憶がしばしば聖人伝として文字に定着された。グレロワは『オバジースの聖エティエンヌ伝』から修道会へのローカルな共同体の抵抗を抉出した⁴⁾。筆者も『サル・の聖ジェロー伝』で聖人崇敬のために創建者の記憶や巡礼の場としてのアイデンティティが再構築される過程を検討した⁵⁾。このように編入された共同体には修道会の制度との調整や過去と現在を統合する必要が多かれ少なかれあり、叙述史料にその痕跡が残されることがある。

本稿が分析の対象とする『レラスのボンスの回心に関する論考とシルヴァネス修道院の始まりの真の物語』(以下『論考』と呼ぶ)は南フランスのルエルグ地方のシルヴァネスを創建した騎士レラスのボンスの生涯とこの修道院の創建事情を内容とする⁶⁾。この共同体もシトー会加入以前に隠修制の過去を持っていた。1160・70年代に内外の問題で動揺していた修道院が規律の立て直しのために起源を想起して改革に正統性を与える試みとしてこの史料を捉えることができるであろう。

シルヴァネスが多くの研究者の関心を集めてきたのは、この例外的な叙

述史料と文書集のカルチュレールの両者が伝来する恵まれた史料状況による⁷⁾。豊富な内容を有するこの史料はこれまで様々な観点から読まれてきた。例えば、バーマンとブルジョワ／ドゥズーはカルチュレールの分析から浮かび上がる経済的実態との関係を論じた⁸⁾。バリエールは12世紀の隠修士運動の共住修道制への回収という大きな展開の中で他と比較してその特徴を検討した⁹⁾。ベイカーは当時ラングドックで勢力を伸ばし始めていた異端に対抗する正統側の俗人的な聖性として捉えた¹⁰⁾。史料の校訂と翻訳を行ったキーンズルは模倣可能な俗人の聖人という点に初期シトー会の聖人伝の特徴を見出した¹¹⁾。さらに、デュアメル・アマドは戦士の回心という点に注目して改革派修道院が定義する貴族の霊性を論じた¹²⁾。中でもバーマンの研究がよく知られているが、カルチュレールに比べて『論考』は客観性に乏しいとして一貫して否定的な評価を与えられている¹³⁾。しかし、この史料は12世紀後半に修道院が自らの起源や富をどのように捉えていたのかの貴重な証言であり、文書史料と合わせて検討することでこれまで注目されていない側面を照らし出すことができるだろう。

本稿では様々な主題に関連して利用されてきた『論考』を編入された共同体の歴史の叙述という観点から再検討し、共同体の起源の記憶が12世紀後半の特定の状況において修道院のアイデンティティを安定化するためにどのように意味づけられているのかを明らかにしたい。そのために第1章では史料の性格について論じ、第2章ではシトー会以前の過去がどのように描かれ、現在に統合されているのかを検討し、第3章では繁栄の中で共同体の富がどのように捉えられ、正当化されているのかを探る。

1. 史料について

第1章では本稿で検討の対象となる史料の性格について論じる。現在伝来する『論考』には2種類あり、そのうちシルヴァネスのオリジナル

は散逸し、1667年にドアが同地で転写したコピーが現在パリの国立図書館に保管されている¹⁴⁾。一方、シトーが所有していた12世紀末の手稿は、ディジョン市立図書館に分類番号611で所蔵されている¹⁵⁾。このように自分たちの修道院で保持するだけでなく、系列の長であるシトー修道院に納める習慣があった。『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』はオバジーヌ写本が修道会に対して批判的であるのに対してシトー写本が「検閲」された内容であることが指摘されているが¹⁶⁾、『論考』は綴り字や語順を除けば、内容的に違いはほとんど見られない。

手稿のルブリックから著者はシルヴァネスの修道士ユーグ・フランシジェナであることが分かるが、この人物の情報はほとんどない。写本には著者からロデーヴ司教ゴスラン宛ての2通の書簡と1通の返信が付属しており、異端の教義に関する内容や文体から一定の学識を持つ修道士であることが窺える。カルチュレールに見える証書作成係のマギステルのユーグが同一人物ならば、書記役をしていた人物になる¹⁷⁾。

『論考』の序言で著者は4代院長ボンス（レラスのボンスとは別人）の命令で作業を開始したと述べており、作成が開始されたのは院長任期の1161年から71年の間である。ところで『論考』には聖堂が建設中であると述べる文があり、1164年の証書に同様の記述があることから、ヴェルラゲはボンスの任期前半を作成時期と特定し、他の研究者も倣っている¹⁸⁾。しかし、聖堂建設はこの後も続くので根拠としては不十分であり、むしろ1170年代初頭に完成したカルチュレールの作成と同じ時期を想定すべきであろう¹⁹⁾。

『論考』の記述は共同体の記憶と記録に支えられている。著者は信頼性を高めるために情報源を明記しているが、院長ボンスは自身が目撃した情報と他の人々が目撃したのを聞いた情報、さらに証言となる文書を提供した。他の兄弟たちからは間接的な情報しか得られなかったが、最初の世代

の司祭ユグとレイモン・アルザラムの2人から直接に目撃した情報を得たと言う²⁰⁾。創建から30数年、ボンズの死去から20数年ほどであり、隠修士の伝記が作成されるまでの期間としては比較的短く、まだ直接見聞きした証人が生存していた²¹⁾。

『論考』はジャンルのには聖人伝(vita)と創立史(exordium)の中間的な性格を有する。ボンズは超自然的な力を欠き、聖遺物や墓の記述もなく、列聖のための奇跡に満ちた聖人伝とは趣を異にしている。主人公は雄弁の才があり、戦士的なエートスを保ち、最後まで助修士(conversus)に留まり、「肉体の強さ」で人々を物質的な側面から支える人物として描かれる。この著作はシトー会に特徴的な成人の回心者(conversus)の伝記であり、修道院の兄弟たちに向けて模範的な人物像を提示する目的で書かれている。

また、手稿が広範囲に分布していないことは『論考』が基本的に内部で朗読され、共同体の結束の強化のために用いられるテキストであり、ボンズの崇敬がローカルであったことを意味している。内容的にも想定読者はまずシルヴァネスの兄弟たちであり、序論で将来の世代に修道生活の起源を伝えることが執筆の目的とされている。「この場所の用地については日々我々は見ているので書くのを控えた」とあるように²²⁾、自明な事柄が省略されている点にも内部向けの性格が表れている。

一方、『論考』のメッセージは部分的には外部にも向けられていると考えられる。悪い戦士の回心物語は、キリスト教的な騎士の正しい振る舞いを定め、修道院への支援へと方向づける教化目的を持つ²³⁾。『論考』では父たちを手本として騎士身分の多くの者が回心したと述べられ、最初の土地を提供し、後に修道士となったアルノー・デュ・ボンが模範として称えられている。物語の受容集団としては修道院と関係のある近隣の領主層が想定される²⁴⁾。

次に『論考』の時間的枠組みを検討すると、三つの場面に大別される。第一がボンズの回心と巡礼の場面であり、盗賊騎士のボンズが回心し、家族を修道院に入れ、広場で改悛をした後に全財産を放棄し、巡礼を行う。第二は隠修士の時代であり、シルヴァネスの荒れ野に定着し、周辺の住民の支援を受け、慈善活動を行う。飢饉が発生し、ボンズが貧者救済の演説を行い、食料増殖の奇跡が起こる場面がこの物語の山場である。第三が修道院の時代であり、シトーカシャルトルーズかの論争が起こり、マザンの指導を経てシトー会の慣習を受け入れ、手の労働と寄進により修道院が繁栄する。このように俗人主導の運動が制度化される過程が描かれる。

空間的枠組みに注目すると、巡礼や交渉の際に広域的な移動をしている点を確認される。例えば、回心の後にサン・ギレムとサンティアゴへ、それからモン・サン・ミシェル、トゥール、リモージュ、ノブラと西フランスの巡礼拠点を参詣した。また、戒律と慣習を採用する際にグランド・シャルトルーズを訪問し、ヴィヴァレ地方のマザンへ赴いた。しかし、こうした機会を除くと、活動の範囲はルエルグに限定され、『論考』の視点はきわめて局地的である。

最後に制度的枠組みの観点から検討すると、まずこの地域のグレゴリウス改革の推進者であるロデーヴ司教ピエールとロデズ司教アデマールの支援者としての役割が強調されている。共同体の活動は複数の司教区に跨るが、ロデーヴの司教区民に特に焦点が当たっている。また、修道院は三つの小教区教会を所有していたが、『論考』では触れられていない。次に、諸侯・領主に関してはロデズ伯が援助を申し出たが、ボンズはその騎士であった²⁵⁾。ビザンツ皇帝やシチリア王やシャンパーニュ伯や近隣の領主や市民の名が見られるように「論考」では俗人の支援者との関係が重視されている。最後に修道会に関しては霊的な模範としてグランド・シャルトルーズが尊ばれ、院長ギーグが助言を与えている。シトー会については母修道

院のマザンと初代院長ピエールが登場するのみでそれ以上の系列関係や総会などへの言及がないのが特徴である。また、修道院が監督する近隣のノナク女子修道院については名前のみでほとんど書かれていない。

このように比較的早く作成されたために豊富な情報に依拠でき、通時的に大きな内容的な欠落はないが、基本的にローカルな関心から書かれた著作であり、どのような出来事や関係が記述されるかは作成時の修道院の関心や利害に深く左右されている。

2. 過去と現在の統合

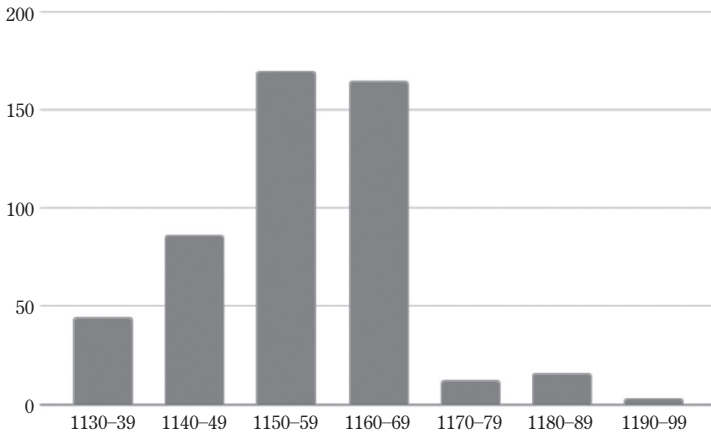
第2章ではシルヴァネス修道院がどのような背景の下でどのように起源の記憶を現在に統合することで共同体のアイデンティティを安定化しようとしたのかを検討する。第1節では4代院長ボンスの歴史編纂事業とその背景について、第2節ではシトー会以前の過去の描かれ方について、第3節ではシトー会への加入の問題について論じる。

2-1 院長ボンスの歴史編纂事業

4代院長ボンス（1161-71）が『論考』の作成をユークに命じた時、シルヴァネスは成長と繁栄の極に達していた。図はヴェルラゲの文書集に収録された12世紀の修道院の証書数の年代分布のグラフであるが、1130年代から50年代までに急増し、60年代は維持するが、70年代以降に激減している。この40年ほどで修道院の所領は完成しており、短期間に多数の取引が集中している点に特徴がある。

ボンスの前任の3代院長ギロー（1141-61）の任期に所領の発展が加速し、1151年の修道院の移転の後には新しい聖堂の建設が開始された。ブルジョワ／ドゥズーによれば、所領の整理統合、生産の専門化、商業化の傾向が顕著になるのもギローの任期である²⁶⁾。こうした繁栄を引き継い

図 12世紀のシルヴァネス修道院の証書数



だボンスは共同体の始めからのメンバーであり、副院長として院長ギローの拡大路線を支えた人物である。ボンスの任期はモンペリエの都市館の設置に始まるが、土地の取得は減速し、経営の合理化によって特徴づけられる。また、新規の修道士と助修士の入会者は増加し続けている²⁷⁾。

繁栄の一方で修道院は多くの困難に見舞われている。まず、この時期の取引の約3分の1は所領の争いに関するものである。多くは世代交代の機会に親世代が寄進した財産を子の世代が取り戻そうと権利を主張する事例である。また、教会組織との係争も増えており、特にホスピタル騎士修道会との十分の一税をめぐる係争が再燃している²⁸⁾。さらに、バーマンが強調するように、近隣のシトー会修道院のヴァルマーニュやボンヌコンブとの競合も所領の拡大の減速につながったと考えられる。このように繁栄の中にあって成長の限界が見え始めていた²⁹⁾。

ボンスが直面した困難の中でも修道士、助修士の逃亡はより喫緊の内部問題であった。当時、モンペリエに逃亡していた教皇アレクサンデル3

世の1162年5月の文書に事情が記されている。それによると、シルヴァネスの修道士と助修士が修道院を捨て、より安逸な生活を送れる他の教会に逃亡した。これに対して教皇はロデズ司教、アルビ司教、ベジエ司教、ロデーヴ司教に逃亡修道士を教会に受け入れないように命じたとされる³⁰⁾。ここで逃亡した人数については不明であるが、教皇に報告が届き、介入するほど重大な問題と認識されたことから数人規模ではないであろう。ボンスが就任して間もない時期に起こっていることから新院長の路線への反発が背景にあり、一部の修道士や助修士が規律の強化に反発して修道院を離れた事情が推測される。このように修道院のメンバーの増大に伴って弛緩する傾向にあるとみなされた規律を改革することを院長は課題とした。

最後に考慮すべき歴史的な背景として、12世紀の半ば頃から南フランスの異端の動向への懸念が教会内で強まり、シトー会が対異端活動へ関与を深めていたことがある。1160年代にはトゥールーズ地方で後にカタリ派と呼ばれる異端の勢力が増し、その指導者たちは聖職者や修道士の弛緩と墮落を激しく批判した。ディジョン611の『論考』に続く3通の書簡は『論考』の著者とロデーヴ司教ゴスラン(1161-87)の間の異端の教義に関する質疑応答であるが、この司教は1165年のロンバールの会議で異端を論駁する役割を果たした人物である³¹⁾。司教の書簡を修道士たちは奪い合って貪り読んだと記されるように³²⁾、新しい異端の脅威を前に緊迫した状況にあった。また、1160年代には教会内部でもシトー会への批判が始め、教皇アレクサンデル3世も小教区教会など修道会で禁じた財産を取得し、係争に忙殺されているとしてシトー会士の貪欲を批判していた³³⁾。

以上のような背景の下に院長ボンスはカルチュレールと『論考』の作成を命じた。この時期にカルチュレールを作成したのは、所領の管理のために修道院がこれまでに獲得した権利を把握し、保護するためであるが、同時に創建以来の文書を集成することで修道院の記憶とアイデンティティを

堅固にする試みでもあるだろう。また、ポンスの任期には繁栄の一方で内外の道徳的な問題に直面しており、規律と秩序を立て直すことが課題であった。したがって、事情を知る世代が消滅する前に『論考』を作成したのは、創建者の偉業と共同体の清貧な起源を書くことで兄弟たちに教化的な話を提供し、創建者の業を継承した現在の体制に正統性を与えることを目的にしていたと考えられるのである。

2-2 起源の記憶

隠修士の生活様式そのものが史料の問題を含んでいること、すなわち隠修士は自らの体験を書くことがなく、孤独の生活は偶然的にしか痕跡を残さず、隠修士の経験は事後的に想像的に構成されるほかないことは研究者によって強調される点である³⁴⁾。レラスのポンスに関しても同様であり、『論考』の隠修士時代への言及は暗示的にとどまり、実態を把握するのは困難である。しかし、『論考』とカルチュレールという異なる種類の史料をつき合わせることで初期の活動や共同体の性格についてある程度推測し、『論考』がどのようにシトー会以前の過去を描こうとしているのかを考察できるだろう。

まず、『論考』においてはシルヴァネスの土地が世俗から離れた「荒れ野」であることが強調されている。「そこで自分たちの手で小屋をつくり、彼らは動物たちといっしょに暮らした。日々労働に専念し、藪を鎌で刈り、土地を鋤で耕し、彼らは人の住めない場所を人の住む場所に変えた」とあるように手の労働によって動物の領域を人間の世界へ改変したとされる³⁵⁾。逆に、飢饉の際には「これを聞いてル・ポンの領主のアルノーは、この土地が再び孤独の地になってしまうことを恐れて、どんなやり方でもそうならないようにした」と一度労働により開かれた土地が荒れ野に戻る可能性について書かれている³⁶⁾。これは申命記32章10節など聖書の記述

に基づいており、『小創立史』や『シトー創立史』の初期シトーや『聖ベルナルの第一伝記』の初期クレルヴォーの描き方と共通している³⁷⁾。

カルチュレルに収録された1132年と33年の証書がこの最初の土地の寄進に関わるが、この土地はテロンのマンスと呼ばれ、ここに聖母マリアの祭壇の教会が建設された³⁸⁾。水流が豊かで耕作や灌漑に向いた肥沃な土地であり、この領域の端には古代以来の温泉があった³⁹⁾。バーマンは証書の詳細な分析によってボンスらが定着した土地は人跡未踏の地ではなく既に開発され、権利関係の錯綜した土地であることを明らかにした⁴⁰⁾。それゆえ、『論考』の「荒れ野」は現実の描写ではなく隠修士的な霊的概念であり、それをシトー会の修辭的伝統に則って表現したものとみなされる。また、注目すべきは、聖母教会、四つのマンス、二つのぶどう畑、森、放牧地と家畜が共同体の初期財産であったが、さらにロデズ司教によってサン・ジャン・ド・ジサクの小教区教会の所有と小教区司祭の任命権が認められていることである⁴¹⁾。シトー会では初期には小教区教会の所有が禁止されたが、シルヴァネスではこの教会を所有し続け、1164年にさらに二つの小教区教会を獲得した⁴²⁾。

シルヴァネス修道院の起源は回心したレラスのボンスと6人の「離れることのない仲間」にある。隠修士といっても単独主義的ではなく、以前の友人が当初より集团的な行動をしていた。この創建者たちのうち聖職者はギローだけであり、俗人の騎士が主なメンバーであった。俗人の信心という点にこの活動の新しい特徴があるが、騎士的な宗教性は「敗者には不名誉が、勝者には名誉が待ち構えている。我々は逃げるためではなく、戦うために来たのだ。だから、立ち止まり、逃げず、勇敢に戦うべきだ」といったボンスの演説の言葉遣いにも表れている⁴³⁾。

初期の共同体のあり方については不明であるが、比較的開放的で包摂的で組織化されていなかったと推測される。レラスのボンスは妻と娘と息子

を修道院に入れた後に回心したが、多くの騎士の中には家族を伴ってきた者たちがいたはずである。共同体が成長し、修道院にすることを決めた際に、修道女のための修道院を建設すべきだという意見があったことが唐突に記されるが、ここから初期の共同体には男女が併存していた事情が窺える⁴⁴⁾。この計画は1139年にデオダ・レモン・ド・モンタニョルが3代院長ギローに譲渡した土地にノナンク女子修道院が創建されて実現した⁴⁵⁾。このようにわずかな示唆はあるものの『論考』は最初の共同体の中の女性たちについては語っていない。

初期の共同体の霊性についてはシトー会と同様に清貧と労働が繰り返し強調されているが、特徴的なのは慈善活動である。『論考』ではベネディクト戒律を引用しつつ、「最初からこの家とその兄弟らの間では、すべての者を宿に受け入れ、困窮している者に食事を与え、貧者を元気づけ、裸の者に服を着せ、死者を埋葬し、この他の敬虔と慈悲の業を果たすという慣習が根付き、ほとんど法のようなものとみなされていた」と言われる⁴⁶⁾。確かにシトー会においても戒律に基づいた慈善は重要な要素であるが、先行する修道制に比べると抑制的であった。しかし、シルヴァネスでは地域の貧者を養うことが共同体の慣習ないし法とまで位置付けられ、「この慣習は神の保護の下でこの場所の可能性に応じて現在まで続いているのが見られる」と『論考』の作成時点にまで続く伝統とされている⁴⁷⁾。仏訳では「この時まで続いていたのが見られる」と半過去で訳されているが⁴⁸⁾、原文では現在であり、隠修士の時代と修道院の時代の連続性が強調される重要な箇所である。地域の慈善活動を二つの時代を貫く共同体のアイデンティティとしているところがシルヴァネスの大きな特徴と言えるだろう。

以上のように『論考』は孤独や清貧や労働といったシトー会と共通性のある隠修士の経験を修道会的な理念の下に統合する一方でシルヴァネスに固有な経験もまた現在に続く伝統として強調している。一方で女性の存在

や小教区教会との関係など初期の共同体の性格を理解する上で重要であるが、シトー会の理念に必ずしも整合しない要素には焦点が当たっていない。

2-3 シトー会への加入

『論考』には隠修制から共住修道制への制度化のプロセスが詳しく書かれている。この節では『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』と比較しながら『論考』がどのようにシトー会への加入を記述しているのかを検討する。

シルヴァネスでもオバジーヌでもシャルトルーズとシトーのどちらの生活様式を採用するかで論争が生じた。1135年にレラスのボンスとオバジーヌのエティエンヌはそれぞれグランド・シャルトルーズに向かい、それぞれ院長ギーグからシトー会を採用するように薦められた。シルヴァネスに関しては、女性の存在、俗人が主体であること、遠距離にあることなどが受け入れを拒否した理由であろう⁴⁹⁾。

ボンスもエティエンヌもシトー会の最も近くの修道院に問い合わせるように助言された。『論考』によれば、ボンスは帰路にヴィヴァレ地方のマザンに立ち寄り、シルヴァネスをシトー会に譲り渡し、院長ピエールに管理を委ねた。院長は修道院建設のために兄弟を派遣する一方、シルヴァネスの兄弟をマザンに招いて一年間の修練の後に修道服を着せて送り返し、初代院長アデマールに修道院の管理を委ねた。こうして1136年にマザンの娘修道院としてシルヴァネス修道院が創建されたと言う。

一方、エティエンヌはリムーザン地方でダロン修道院に師を求めた。ダロンは隠修士の共同体から発展し、シトー会の慣習を採用していたが、正式な修道会メンバーではなく、多くの修道院からなる連合を形成していた。過酷な師に対する反感が高まり、ダロンとの関係が緊張すると、エティエンヌは1147年にシトー修道院を訪れ、修道会総会で教皇エウゲニウ

ス 3 世を前にシトー会に正式加入した。つまり、オバジーンはシトー会の慣習を採用した後に正式に修道会に加入するという二つの段階を踏んでシトー会修道院になった。

ところで、これまで『論考』に従ってシルヴァネスは1136年にシトー会に正式加入したと考えられてきたが、バーマンはこれを否定し、この時点ではマザンもシルヴァネスもシトー会ではなかったと主張した。すなわち、マザンもシルヴァネスも隠修士の共同体であり、これがシトー会の慣習を受け入れたのは1160年代であったというのである⁵⁰⁾。シトー修道会の成立を12世紀後半に見ようとする独自の仮説から導かれた見解で受け入れられないが、1136年にマザンが果たして正式なシトー会修道院であったのかという点は検討の余地がある。

マザンの創建については古くから論争があるが、それは矛盾した二つの史料に起因している。一つは1123年の教会の聖別の際のヴィヴィエ司教の証書であり、司教が隠修士の集団をマザンに定着させたと述べている。もう一つは『オトリヴの聖アメデ伝』の9章であり、シトー会ボンヌヴォー修道院のアメデがマザンを創建したと記されている⁵¹⁾。両史料の記述の矛盾をなんとか解消してマザンはボンヌヴォーを母修道院とするシトー会修道院として1119年に正式に創建されたと考えられてきたが、モラン・ソヴァドはボンヌヴォーの系列の形成の研究において『アメデ伝』の記述は後世の創作であり、ボンヌヴォーがマザンの連合を管理下に置いたのは1140年代か50年代であったと主張した⁵²⁾。

このようにマザンが当時正式なシトー会修道院でなかった可能性は十分にあり、その場合は上述のダロンと同じようにマザンは修道会の外でシトー会の慣習を採用する修道院の連合を形成していたことになる。『論考』においてマザンとシルヴァネスの二つの共同体の関係しか触れられず、ボンヌヴォーやシトーといった系列上位の修道院やシトー会総会に全く言及

がないこともこの事情を示唆する。したがって、1136年にシルヴァネスがシトー会の慣習を採用する修道院になったことはほぼ間違いないが、正式にシトー会修道院であったかどうかは不確実である。ところが、『論考』では「サルヴァネスの家をシトー会に譲り渡した (Salvaniensem domum Cisterciensi ordini reddidit)」と修道会に正式に加入したように受け取れる曖昧な記述をしているのである⁵³⁾。

以上のように『論考』は内外の問題に直面した修道院の改革の一環として書かれたテキストであり、起源を想起し、二つの時代に連続性を与え、その移行を正当なものとする事で修道院のアイデンティティを安定化するように入念に書かれている。

3. 富の善用

『論考』は財や食料への言及が非常に多く、霊的なものと物的なもの絡み合いの様相が物語の全体を通じて描かれている⁵⁴⁾。第3章では『論考』において二つの時代のシルヴァネスの共同体の経済がどのように描かれているのか、そこにどのような霊的な意味づけが与えられているのかを検討する。第1節では隠修士の時代の富の循環のあり方について、第2節ではシトー会修道院の時代の富の蓄積と生産のあり方について論じる。

3-1 富の循環

隠修士の時代の『論考』の中心的な主題は施しによる富の循環と相互的な扶養関係であり、回心の場面、巡礼の場面、隠修士共同体の場面の三つの場面を通じて繰り返し描かれている。まず、レラスのボンスはそれまでの悪行を悔い改め、回心した際に『マタイによる福音書』19章21節「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、私に従いなさい」

い」を文字通りに実践した。この章句については富裕な若者に財産放棄を直接勧めるものではなく、修道士だけに適用されるものと解釈されていたが、12世紀になると「自発的貧困」の概念が改革派によって標榜され、多様な主体によってこの章句に新たな価値と意味を与えられるようになったことが知られる⁵⁵⁾。『論考』におけるボンズの肖像はまさにこうした12世紀的な自発的な貧困の実践の典型として位置付けられるものである。

『論考』はこの財産放棄のプロセスについて詳述している⁵⁶⁾。それによると、ボンズが告知してすべての持ち物を売りに出し、あらゆる階層の人々が財布を持って集まって購入したが、売れ残ったものについて役畜や農産物を代価として受け取る旨を伝えた。それからすべての不動産を売り払い、雄馬と雌馬、雄ラバと雌ラバ、雄牛と雌牛、羊や山羊を手に入れた。次に借りたものや暴力的に奪ったものを返すためにベゲロルという村に来るように人の集まるところはどこでも使者を送った。復活祭前のシュロの枝の日にロデーヴの広場で司教と民衆を前に公的に贖罪を行った後に、聖週間の二日目、三日目、四日目にベゲロルに多くの請求者を集め、上述した財産や家畜から失ったものと同等の物を各人に返還した。そして残っている財産のすべてを困窮者に施した。最後の晩餐の五日目には13人の貧者を引き受け、食事を与え、足を洗った。こうして借りたもの、収奪したものを返却し、さらに貧者に施すことで、ボンズは奪う人から施す人、養う人へと変じた。

ボンズと6人の仲間たちの巡礼の場面での生活ぶりはその日暮らしの経済と呼ばれるのがふさわしいだろう。『論考』によれば、簡素な衣服以外は身に着けず、杖と背囊だけを持ち、裸足で巡礼を行ったが、食料が必要なところではどこでも多くの人が進んで提供した。また、富裕者が多くを提供したならば、一日の食料に必要なだけを受け取り、残りは返却し、受け取ることを強いられた時には貧者に分配した。『マタイによる福音書』

6章34節の「明日のことを思い悩むな」に基づいて、金を信じず、必要なものだけを受け取り、将来のためになにも持たない不安的な生活であり、食料なしで何日も過ごすことがあっても、神に感謝したとされる⁵⁷⁾。このようにボンズとその仲間たちは無所有で人々に施され、養われる存在として描かれている。自発的な貧者となったことで霊的な権威を手に入れ、人々から施しを受けられる存在に変化したのである。

最後に隠修士共同体の場面であるが、巡礼から戻った一行は、在地領主のル・ボンのアルノーから土地の贈与を受け、定着した。その後、彼らの信心の名声が近隣の司教区に広まると、多くの人が彼らのもとを訪れ、贈り物を提供し、どんなことでも助けた⁵⁸⁾。隠修士の禁欲生活は周辺住民の施しや支援で成り立っていたが、受け取るだけではなく積極的に慈善活動を行った。前述したように、客人の歓待、貧者の給養、死者の埋葬はこの共同体の慣習であった。ここには隠修士共同体と地域社会の施し／施され、養い／養われる関係の中で財と食料が循環している構図が見て取れる。

こうした中で大飢饉の発生という危機的な出来事が生じ、地域社会における隠修士共同体の役割が試された。貧者の大群が押し寄せ、兄弟たちが怯んでいると、ボンズが逃亡を禁じ、貧者を救援するよう、「糸の切れ端から靴ひもまで」共同体のすべての財産を売り払い、施すように叱咤激励する演説を行う。かつては個人の財産を放棄したが、今度は共同体の財産であることが強調され、牛と羊、役畜と家畜といった動産が具体的に挙げられる。そしてボンズは「物乞いのための物乞い」の役割を果たすべく世俗の領主たちのところへ赴く。ル・ボンのアルノーは倉庫を開けて短期間、貧者を養うように食料を提供したが、この時に食料が増殖する奇跡が起り、天上のマナのように荒野にいる人々を次の収穫の時まで食べさせたと言う。この奇跡の場面では祝福 (benedictio) の語が三度用いられ、

神の祝福による豊穰という主題が強調されている。戻ったポンスは洗礼者聖ヨハネの祝日にすべての人に食事を用意しふるまってから帰したところ、まさしく神の家であるという評判がたった⁵⁹⁾。

このように『論考』においてポンスは人々に食べさせるように奔走する人物として、荒れ野の清貧な共同体は富の循環の結節点として写し出されている。施し／施される、養い／養われる関係が立場を替えて記されるが、必ずしも対称的な関係ではなく、自発的な貧者がその霊的権威により施しを集め、非自発的な貧者に施す関係が成立している。巡礼集団から定住共同体に変化するとともに共同体は施しを通じた地域の富の循環の中で配分者の地位を占めているのである。

3-2 修道院の富

修道院の時代には寄進＝施しによる富の蓄積と手の労働による生産が中心的な主題となっており、修道院の富の正当化が試みられている。『論考』には経営の単位であるグランギアやモンペリエの都市館などの具体的な言及はなく、修道院財産は暗示的に書かれる。また、経済活動についても、当初から重要であった牧畜や12世紀後半に盛んになる商業活動や鉱業のような産業には全く触れられておらず、手の労働はあくまでも農業生産のイメージで表現されている。

修道院時代のレラスのポンスについては、謙遜と服従を貫き、常により低い地位を選ぼうと努めて助修士の立場に留まり続け、常に神の僕の僕となるように俗人の兄弟の衣服を着て、修道院全体に生活の必要物を供給する役割を果たしたとされる。カルチュレールに収録された証書では1146年まで助修士として土地の譲渡の証人をしているのが確認できる⁶⁰⁾。最後まで俗人の信心の形を示したポンスはエビタフで「敬虔で、賢明で、控えめで、慎み深く、節度があり、貞潔で、落ち着きがあった」と生前の徳

が列挙された後に、「この世にある間は彼は奮い起こした、自分の肉体の強さを」と強靱な肉体で物質生活を支えたこと、養う人であったことが称えられている⁶¹⁾。

『論考』では修道院には隣人ばかりでなく、遠隔の地方や海外の人々からも多くの贈与が集まったと言われ、代表的な寄進者とその善行が顕彰されている。ビザンツ皇帝ヨハネス 2 世コムノネス、シチリア王ルッジェーロ 2 世、シャンパーニュ伯ティボー 4 世といった著名人だけでなく、最初の聖堂建設に寄進した数人が特筆されている。すなわち、富裕な貴族のギヨームが海外から銀200マルクを送り、ロデーヴ市民のピエール・エヴランが寝室建設のために銀100マルクを提供し、息子のエヴランが食堂を建てた⁶²⁾。1151年に修道院が遠くない場所に移転された時には、この土地の購入のために前述したギヨームが銀200マルクを提供した。3代院長ギローの事業として新しい修道院の建設が始まり、前述したピエール・エヴランの息子でロデーヴ教会の聖具係のピエール・エヴランと兄弟のギローが寝室を建て、ロデーヴ教会の聖職者のクラリウスのリシャルが食堂を建てた⁶³⁾。このように『論考』は善行者の施しについてかなり具体的に寄贈額まで明示的に記している。

寄進者に対して提供する修道院の祈祷についても『論考』では詳しく記されている。上述の貴族のギヨームには「彼の記念は祝福とともに我々の特別の友人・恩顧者の間で周年ではなく、日々執行され、尊重されている」と特別に毎日祈祷がなされていた⁶⁴⁾。また、寄進者の名前の列挙の後には、「彼らがサルヴァネス修道院の建設者・創設者であり、敬虔の徳により我々の友人・恩顧者の中で第一の地位を占めるのにふさわしく、彼らの記念が見捨てられることはないであろう。シトー会が存続する限り、彼らが記念されず、荘厳な祈りが彼らのためになされないような日が過ぎることは一日もないからである」と特別な友人として永代の記念が約束さ

れている⁶⁵⁾。

このように『論考』では地域の有力者に対する救霊機関の役割を修道院が果たしていることが強調されている。修道院の死者記念はとりわけ先行するクリュニー派で大規模に発達し、領主家系との間に霊的・物的に緊密な関係が形成されたことが知られている。シトー会では初期には外部との関係を見直し、典礼の負担を軽減するために死者記念には抑制的で12世紀末から個人の周年記念祷が増加する傾向があるが⁶⁶⁾、『論考』では1170年代には善行者の施しに対して祈祷の提供が毎日なされ、地域の救いのエコノミーに参画しているように描かれている。ル・ポンのアルノーが最初の土地を寄進した時にも「あなた方の気に入るところならどこにでも住み、建て、蒔き、植え、ぶどう畑をつくり、私のために祈ってください」と施しに対する祈りに言及されている⁶⁷⁾。このように『論考』は執り成しの祈りを修道院の本質的な活動に位置付け、霊的なものと物的なものの交換関係を描いている。

さらに、修道院の繁栄は、「肉に生きる者たちはこの教会を自らの労働で設立し、今や栄冠を与えられ、自らの労働のシュロの枝を受け取った」とあるように創建の父たちの労働の報いとして捉えられている。父祖たちの労苦の果実を収穫しているのだから彼らの魂に現在の世代も将来の世代も恩義があるとされ、さらに、「彼らが我々の祈りを必要としている以上に、我々は彼らの祈りを必要としているが、彼らの徳と執り成しによって神はこの場所を常に導かれ、守られている」とあるように、創建者たちの執り成しによって修道院が保護されているという死者と生者からなる共同体の像が示される⁶⁸⁾。

また、現在の繁栄は父祖だけでなく兄弟たちの日々の労働に対する神の報いとしても説明されている。「その間に、兄弟らは神の称賛に余念なく、日々の労働に専心した。畑に種を蒔き、ぶどうを植え、新しい果実をつく

った。神は彼らを祝福なさり、彼らは大いに増やされた」と手の労働による農業生産活動への祝福として修道院の成長が捉えられる。そして、神によって労働の果実を得たのであるから、修道院では主の掟を守り、主の法に従う義務があるとされる⁶⁹⁾。

神の祝福による修道院の成長という主題は農林業的なメタファーで語られる点に特徴がある。例えば、序言において修道院は樹木にたとえられ、「天上の農夫の手」が常にこの木の世話をし続け、木を成長・発育させ、恵みの雨で水を与え、念入りの配慮で他の木々の中にあってひととき高く育て上げたとされる⁷⁰⁾。このような比喩によって神の世話と修道士の労働が共同体の成長と増加をもたらしたという像が示されている。

以上のように全財産を放棄した回心者、巡礼集団、隠修士の定住的な共同体、シトー会修道院へと経済の形態が段階的に変化していく様子が描かれていた。そうした中で修道院に蓄積される富については、執り成しの祈りと手の労働に対する報いを理由にして正当化されていた。

おわりに

ここまでシルヴァネス修道院が共同体の起源をどのように記憶したのか、それが作成された状況においてどのような意味を持っていたのかを見てきた。第4代院長ポンスは1160年代から70年代に内外の動揺を抑えて修道院の規律を立て直す改革の一環として創建者と共同体の歴史の編纂事業を行った。修道院の内部では修道士や助修士の逃亡事件に対して、また、外部からの弛緩や貪欲の批判に対して、修道院の清貧の起源を想起し、現在に適用することで改革に正統性を与える必要があった。過去が現在とどのように統合されているのかを検討すると、まず孤独や清貧や労働といったシトー会と共通する要素を修道会的な理念の下に統合する一方で活発な慈善活動のような固有な要素も伝統として強調している。これはお

そらくは修道院内部の隠修士時代の慣習を重視する勢力とシトー会的な理念を尊重する勢力との妥協の結果としての修道院のアイデンティティのあり方であろう。一方でシトー会の理念に必ずしも整合しない要素は記述されない傾向がある。また、『論考』では隠修制から共住修道制への制度化の過程について正当な手続きを経ているように記されている。

また、全財産を放棄する回心者、施しに依存する集団、施されつつ再分配する共同体、施しを蓄積し、労働により生産し、再分配する修道院へと段階的に経済の形態が変化するように描かれている。これは経済神学的な像であり、必ずしも修道院経済の実像を正確に映し出すものではない。地域における慈善活動は共同体の慣習として二つの時代をつなぐが、これを象徴するのが飢饉の記憶である。型通りの奇跡話として従来の研究では軽視されてきたが、緊急時の食料支援の話は『論考』の中心的な位置を占めており、地域への施しの記憶として現実的に重要な意味を持っている。修道院は地域の富の循環を促進し、地域民を養う存在として提示されるが、ここに当時のシトー会に対する食欲の批判、すなわち富の循環を塞き止める者という批判に対する応答を見ることができるであろう⁷¹⁾。飢饉の記憶は執り成しの祈りや手の労働に対する報酬という観念とともに修道院の富を最終的に正当化する機能を果たしている。

注

- 1) Bouter, N., ed., *Ecrire son histoire: les communautés religieuses régulières face à leur passé*, Saint-Étienne, 2006.
- 2) Caby, C., « De l'abbaye à l'ordre : écriture des origines et institutionnalisation des expériences monastiques, XI^e-XII^e siècle », *Mélanges de l'école française de Rome*, 115-1, 2003, pp. 235-67. また, Grémois, A., « Formation et utilisation du discours historique chez les cisterciens (XII^e-début XIII^e siècle) », L. Bantigny, A. Benain, M. Le Roux, ed., *Printemps d'Histoire. La Khâgne et le*

- métier d'historien. Pour Hélène Rioux*, Paris, 2004, pp. 86–94.
- 3) Freeman, E., *Narratives of a New Order: Cistercian Historical Writing in England, 1150–1220*, Turnhout, 2002; Burton, J., “Constructing a Corporate Identity: the Historia Foundationis of the Cistercian Abbeys of Byland and Jervaulx”, A. Müller, K. Stöber, ed., *Self-Representation of Medieval Religious Communities: the British Isles in Contexts*, Berlin, 2009, pp. 327–40; France, J., “Cistercian Foundation Narratives in Scandinavia in their Wider Context”, *Cîteaux: Commentarii Cistercienses*, 43, 1992, pp. 119–60.
 - 4) Grémois, « Les origines contre la Réforme: nouvelles considérations sur la «Vie de Saint Étienne d'Obazine », *Ecrire son histoire*, pp. 369–88.
 - 5) 拙稿「13世紀末のシトー会レ・シャトリエ修道院におけるジェロー・ド・サル」の記憶」(『人文研紀要』92号, 2019年) 343–68頁。
 - 6) 創立史のラテン語校訂版は, Kienzle, B. M., “The Works of Hugo Francigena: Tractatus de conversione Pontii de Laracio et exordii Salvaniensis monasterii vera narratio; epistolae (Dijon, Bibliothèque municipale Ms. 611)”, *Sacris erudiri*, 34, 1994, pp. 273–311 (以下, *Tractatus* と略記)。日本語訳は, 拙稿「盗賊騎士の回心と改革派修道院の成立: 『レラスのポンスの回心に関する論考とシルヴァネス修道院の始まりの真の物語』試訳」(『中央大学文学部紀要』63号, 2018年) 59–81頁。
 - 7) Verlaquet, P.-A., ed., *Cartulaire de l'abbaye de Silvanès*, Rodez, 1910 (以下, *Silvanès* と略記)。
 - 8) Berman, C.-B., “The Foundation and Early History of the Monastery of Silvanès: the Economic Reality”, J. R. Sommerfeldt, ed., *Cistercian Ideals and Reality*, 1978, pp. 280–318; Bourgeois, G., Douzou, A., *Une aventure spirituelle dans le Rouergue méridional au Moyen Age: ermites et cisterciens à Silvanès: 1120–1477*, Paris, 1999.
 - 9) Barrière, B., « Les abbayes issues de l'érémisme », *Limousin médiéval, le temps des créations*, Limoges, 2006, pp. 555–79.
 - 10) Baker, D., “Popular Piety in the Lodévois in the Early Twelfth Century: The Case of Pons de Leras”, *Studies in Church History*, 15, 1978, pp. 39–47.
 - 11) Kienzle, “Pons de Leras, A Twelfth-Century Cistercian”, *Cîteaux: Commentarii Cistercienses*, 40, 1990, pp. 215–25.
 - 12) Duhamel-Amado, C., « Le “miles conuersus et fundator”: de Guillaume de Gellone à Pons de Leras », M. Lauwers, ed., *Guerriers et moines. Conversion et sainteté aristocratiques dans l'Occident médiéval (IX^e - XII^e siècle)*, Antibes,

- 2002, pp. 419–27.
- 13) Berman, *The Cistercian Evolution: The Invention of a Religious Order in Twelfth-Century Europe*, Philadelphia, 2000.
 - 14) Paris, Bibliothèque nationale, fonds Doat, vol. 150, f. 1–36. 18世紀にバリューズによって刊行され、ヴェルラゲのカルチュレールの刊本に修正・再録された。Baluze, E., *Miscellanea*, I, Lucques, 1761, pp. 179–84.
 - 15) Dijon, Bibliothèque municipale, ms. 611.
 - 16) Grémois, « Les origines contre la Réforme », p. 386.
 - 17) Kienzle, “The Works of Hugo Francigena”, p. 274.
 - 18) *Silvanès*, introduction, XIII.
 - 19) 聖堂の完成年は不明であるが、石切場の譲渡は1159年、1164年、1168年、1173年になされており、工事は長期であった。Durand, G., “L’église de l’abbaye cistercienne de Sylvanès (Aveyron)”, *Archéologie du Midi médiéval*, 2, 1984, p. 83.
 - 20) *Tractatus*, pp. 287–88, 302.
 - 21) Milis, L., « Ermites et chanoines réguliers au XII^e siècle », *Cahiers de civilisation médiévale*, 85, 1979, p. 40.
 - 22) *Tractatus*, p. 301.
 - 23) Lauwers, M., « Postface: sainteté seigneuriale et ordre social », *Guerriers et moines*, p. 637.
 - 24) キーンズルは *militaris ordinis* を騎士修道会と解釈しているが、ここでは騎士身分を意味している。また、デュアメル・アマドは物語を受容したのはギレムを名乗る家系 (*la familia guilhemide*) と特定したが、修道院の「友人」の全体が想定される。Duhamel-Amado, *op.cit.*, p. 427.
 - 25) Bourgeois, Douzou, *op.cit.*, p. 47–8.
 - 26) *Ibid.*, pp. 109–16.
 - 27) *Ibid.*, pp. 132–34, 143–52.
 - 28) *Silvanès*, n° 170, 171, 174.
 - 29) Berman, *The Cistercian Evolution*, p. 110.
 - 30) *Silvanès*, n° 5.
 - 31) ロンベールの会議については、Moor, R. I., *The Birth of Popular Heresy*, London, 1975, pp. 94–8.
 - 32) *Tractatus*, p. 309.
 - 33) Leclercq, J., « Passage supprimé dans une épître d’Alexandre III », *Revue bénédictine*, 62, 1952, pp. 149–51.

- 34) Milis, *op.cit.*, pp. 39–40.
- 35) *Tractatus*, p. 295: “In quo casulas propriis manibus fabricantes manserunt, bestiis sociati. Cotidiano tamen labori insistentes, dumeta falcibus resecantes, terram ligonibus proscindentes, locum habitabilem ex inhabitabili reddiderunt.”
- 36) *Ibid.*, p. 297: “Quod audiens domnus Arnaldus de Ponte, hoc fieri modis omnibus prohibuit, timens ne iterum locus in solitudinem deveniret.”
- 37) 灯台の聖母トラビスト大修道院編訳『シトー修道会初期文書集』サンパウロ, 1989年, 27, 144頁; Paul, J., « Les début de Clairvaux. Histoire et théologie », *Du monde et des hommes. Essais sur la perception médiévale*, Aix-en-Provence, 2003, pp. 181–99.
- 38) *Silvanès*, n° 9: “totum mansum de Terundo cum omnibus sibi pertinentibus, erminio et condricto, in quo altaris prescripti ecclesia fundata est”
- 39) Bourgeois, Douzou, *op.cit.*, pp. 75–6.
- 40) Berman, “The Foundation and Early History of the Monastery of Silvanès”, p. 284.
- 41) *Silvanès*, n° 8: “ut nemini liceat sacerdoti obtinere prefatam ecclesiam sine consilio et consensus fratrum in ecclesia jam dicta religiose viventium”
- 42) シトー会と小教区教会の関係については、大貫俊夫「盛期中世におけるシトー会修道院の小教区＝農村共同体形成への関与に関する研究」(『西洋史研究』新輯第44号, 2015年) 1–23頁。
- 43) *Tractatus*, p. 296.
- 44) *Ibid.*, p. 298.
- 45) *Silvanès*, n° 47.
- 46) *Tractatus*, p. 296: “Erat autem domui illi et fratribus illis ab initio inolita consuetudo et quasi pro lege tenebatur, omnes hospicio recipere, alere egentes, pauperes recreare, nudos vestire, mortuos sepelire et cetera pietatis et misericordiae opera adimplere.”
- 47) *Ibid.*, p. 296: “Quae consuetudo usque in presentem diem secundum loci possibilitatem, favente Deo, durare cernitur.”
- 48) Bourgeois, Douzou, *op.cit.*, p. 26.
- 49) ベイカーは俗人が指導者であることと距離を理由としている。Baker, *op.cit.*, p. 43.
- 50) Berman, *The Cistercian Evolution*, p. 117.
- 51) Morin-Sauvade, H., « La Filiation de Bonnevaux », N. Bouter, ed., *Unanimité*

- et diversité cisterciennes: filiations, réseaux, relectures du XII^e au XVII^e siècle*, Saint Etienne, 1999, pp. 103–19.
- 52) Grélois, « L'expansion cistercienne en France: La part des affiliations et des moniales », *Norm und Realität: Kontinuität und Wandel der Zisterzienser im Mittelalter*, Berlin, 2009, p. 303. 博士論文の Morin-Sauvade, *La filiation de Bonnevaux-Ordre de Cîteaux (XII^e-XV^e siècles): contribution à l'étude des réseaux monastiques*, 2002 は未刊行であり, 参照できなかった。
- 53) *Tractatus*, p. 298.
- 54) 本章の議論の枠組みに関して, Toneatto, V., *Les Banquiers du Seigneur. Évêques et moines face à la richesse (IV^e-début du IX^e siècle)*, Rennes, 2012 が参考になった。
- 55) 聖書注解書における貧困の言説については, Bain, E., *Église, richesse et pauvreté dans l'Occident médiéval. L'exégèse des Évangiles aux XII^e-XIII^e siècles*, Turnhout, 2014.
- 56) *Tractatus*, pp. 289–92.
- 57) *Ibid.*, pp. 293–94.
- 58) *Ibid.*, p. 295.
- 59) *Ibid.*, pp. 295–98.
- 60) *Silvanès*, n° 405. ブルジョワ／ドゥーズーはボンスが登場する 382 番の日付のない証書の作成年代を 1147 年から 1153 年と想定している。Bourgeois, Douzou, *op.cit.*, p. 108.
- 61) *Tractatus*, p. 300.
- 62) *Ibid.*, p. 299.
- 63) *Ibid.*, p. 300.
- 64) *Ibid.*, p. 299: “Cuius memoria in benedictione inter speciales amicos et familiares nostros non solum anniversario cursu, sed etiam cotidiano usu celebratur et colitur.”
- 65) *Ibid.*, p. 300.
- 66) Jamrozak, E., *The Cistercian Order in Medieval Europe, 1090–1500*, New York, 2013, pp. 97–8
- 67) *Tractatus*, p. 295.
- 68) *Ibid.*, pp. 300–1.
- 69) *Ibid.*, p. 301.
- 70) *Ibid.*, p. 287.
- 71) 貪欲概念については, Toneatto, *op.cit.*, pp. 101–35. 飢饉の際の貧者救援と

修道院経済の正当性については、Boquet, D., Nagy, P., « La Vita d'Etienne d'Obazine († 1159), une aventure alimentaire », E. Lalou, B. Lepeuple, J.-L. Roch, ed., *Des châteaux et des sources. Archéologie et histoire dans la Normandie médiévale*, Rouen, 2008, pp. 541–54.